

保育と社会福祉を漫画で学ぶ

⑪ 『ひだまり保育園おとな組』

迫 共
(浜松学院大学)

『ひだまり保育園おとな組』。ジェンダー、セクシュアリティ、子育てなどの問題を鮮やかに描き出す坂井恵理さんの作品です。

保育園の日常は子どもたちが主人公。しかしこの作品は、園児の周りの大人たちが繰り広げるオムニバス・ストーリーです。社会の「よくある光景」の中に、当たり前のように流されてしまう子育ての負担、女性側の生きづらさと、男性の認識とのギャップなどについて考えさせられる場面がたくさん描かれています。

「家から会社までの通勤時間が夫より 15 分短い」、だから毎日の登園とお迎えは「私の担当」と考える美樹は、会社勤めと家事、育児の両立に困難を感じながら子どもと向き合っています（第 1 話「プリンとオムツ」）。

夫は自分が負担を増やしているとは気づかず、『産後うつ』ってホルモンバランスの乱れで…』と美樹に説明。「そんなことをスマホで読んでるヒマがあったら、オムツ替えろ！ 皿を洗え！ 部屋を片付けろ！ 子どもを抱け！」と心の声を押し殺す美樹。翌日、あふれる気持ちを、職場の先輩シングルマザーの前でつい爆発させてしまいます。先輩からは「私たちが『察して』って思っちゃうのは、私たちが常にダシナのこと、察してあげちゃっているからじゃない？」と指摘されます。「私たち、愛とかそんなふんわりしたものだけで育児してないよね」。

美樹は職場で考えます。「定期的な授乳、オムツ替え、予防接種・検診スケジュールの管理・把握、抱っこしても泣きやまなければ他の方法を考え、実行。意外と仕事と育児のやり方って似てる…？」「家事と育児の作業量・情報量の多さ。これがもし、まともな『会社』ならば、たったひとりに業務をまかせず、リスクを分散して情報を共有し、ひとつのプロジェクトに取り組むはず」。

帰宅後、美樹は夫に、平日と土日での家事・育児の分担を提案し、連絡事項はホワイトボ

ードに書くことを提案します。夫は「なんか会社みたいだな」と呟きますが、「やってみると具体的でわかりやすいかも」と納得します。愛情だけでも愛情ぬきでも、育児を含んだ生活と仕事のバランスは成立しません。それは子どもに対してだけでなく、子育てのパートナーに対しても同じように言えると思います。

第10話「需要と供給」は待機児童問題がテーマ。自営業の美容師まどかは、わが子の預け先を求めて、区役所の窓口⇒認証保育所⇒認可外保育所⇒ベビーシッターの登録会社と回った末に、夫に偽装離婚さえも提案します。「すんなり認可が決まった」という常連客が「ウチは夫婦ともに両親死んじゃってるから、そのせいもあるかも」と話す場面では、「今『そのせい』じゃなくて『そのおかげ』って言いそうになっちゃった」と続き、「こんなのおかしいよね」と苦笑い。

ひだまり保育園の職員会議では運動会の準備が話題にのびります。行事の前にはサービス残業が普通になり、「休日はまたしばらくミシン縫いだわ」というつぶやきが保育士たちからこぼれます。保育園の日常に閉塞感をもっていた男性保育士、まさとが発言します。「保育園の行事って全学年が参加する必要がありますかね？」

保育士たちから「楽しみにしている親御さんもいるから」「今は SNS にあげたりする人も多いし」「まさと先生がクレーム対応全部してくれるっていうなら考えてもいいけど」と発言が続き、前年同様の行事が続けられることになってしまいます（第14話「pride and prejudice」）。

まさとには同性パートナーがおり、レズビアンカップルに精子提供してできた息子がいます。息子は別の保育園に通っていますが、まさとも二人のママも保育園には事情を説明していません。ママたちはシングルマザーとその姉として通園しています。まさとも子どもがいればと考えますが、男性保育士というだけでも警戒されてしまう昨今です。仮に男性二人で子育てををするとしても、保育園利用は怪しまれる…というセリフが出てきます（第3話「オトコとオトコ」）。

お月見の製作用に、色画用紙をウサギの形に切っているまさと。自宅での持ち帰り仕事です。イラストレーターであるパートナーから「なんでウサギから描かせないの？」「いいじゃん、メチャクチャなウサギでも。その方が面白いのに」と言われ、「ひとりあたり5~6人の子どもを見てるんだもん。そこまで面倒見きれないよ」と返答してしまいます。

まさとは自分の口から出た言葉にハッとします。「どうして僕は子どもを持つことに躊躇するのか…」「男親ふたりってことへの、まわりの反応を考えるとこわいとか、そういうのはもちろんあるんだけど、ここで『子どもを育てたくない』って、自分の職場なのにそう思

ってるんだ…」『個性を尊重』って口では言いながら、行儀よく並んでみんなで同じこととして、そこからはみ出さないのが『いい子』なんだ」。

まさとが持つ違和感の正体は、同僚保育士が大変だと言いながら、仕事のやり方を変えられると思っていないことだけでなく、イレギュラーな自分たちが保育園にいたことが、想定すらされていないことでもあるようです。

翌日、自由遊びの時間におもちゃの台所で遊ぶ園児に、同僚の保育士が声をかけています。「まりちゃん、いいお嫁さんになるわね」「ゆーだいくんは将来、コックさんかな？」

ハートのついたまほうステッキで遊ぶ男の子に、「それおんなのこのオモチャだよ」という男の子が出てきます。

振り切るように、まさとは子どもたちに呼びかけます。「自分のこと、女だと思ってる人ー！ 男だと思ってる人ー！ かいじゅうだと思ってる人ー！」

まさとの同僚、保育士2年目のアイコ先生が「10月いっぱいまで退職させてください」と申し出てきます。まさとはアイコ先生と帰り道を歩きながら、「子どもがキライになったわけじゃないんだ？」と聞き出します。アイコ先生は「キライなのは、保育園に長時間子どもを預けてまで働くような母親です」「子どもが小さいうちは一緒にいてあげるべきですよ」と言い放ちます。

「育児は女がやるものでしょ」と無邪気に話すアイコ先生。「カンタンに別れるくらいなら子ども作らないでほしいです。あたしは結婚したら一生添い遂げます」「あたし、ようやく気付いたんですよ。他人の子じゃなくて自分の子をかわいがりたいんだって」。

アイコ先生と入れ替わりにやってきた男性保育士、こうた先生が新たな問題を巻き起こします。彼が園児たちのプールでの写真をブログにあげたところ、その写真がポルノサイトに転載されてしまい、それを発見した保護者が激怒したのです。こうた先生は、お詫びと言いながらも「あの写真は裸とかじゃないし…」と、保護者の感情を逆なですてしまいます(第15話「crime and punishment」)。

「本音でお話ししない？」と保護者の奥寺さんが呼びかけます。「子どもってかわいいよね。もう若いってだけでキレイだよ。40代の私がどんな高級化粧品使ったりしたってあの頃には戻れない。あのスベスベの肌に触りたいとは、正直思うわ。だから、そういう気持ちじゃまったくわからないわけではないの」。

こうた先生は「そ…そうですね！ それに性癖って生まれつきなところあるし…」
「LGBT とかを差別しちゃダメならロリコンだって認められていいはずですよ？」と返答。奥寺さんは「それにはちょっと違和感がある」と返します。

『俺のいいなりになりそう』とか『女より優位に立ちたい』とかホントにないって言い

切れる?」「子どもにしか興味ない男って、そもそも女性とコミュニケーション取る気がないんだなって思っちゃう」「自分のコンプレックスや弱さだとか、そういうの直視できないくせに、自分より弱い子どもや女の子に自分をまるごと受け止めてほしい——私はそういうのが、他と替えのきかない性癖の小児性愛者とはどうしても思えない!」「中には生まれついての人もいるのかもしれないけど、でももしその自覚があるなら、保育士や教師を目指すべきじゃないと思う」。

「先生がロリコンじゃないのはわかっています。だけど私が感じてると同じくらい、子どもへの性犯罪に危機感を持ってくれないと、こっちは信用できないんです!」「それは男性保育士に限らず、女性でも同じです」。

小児性愛が生得的なもののだとしたら、当事者にとってこの世界はたいへん生きづらいものです。しかし「他と替えのきかない」LGBTと同列に語っていいのか、ということについては研究の進展を待つ必要があるでしょう。

ただ、保育業界には男女を問わず、「大人と対等のコミュニケーションをすることが難しい」ということから、子ども相手の仕事を選んだという人が（自覚の有無については分かりませんが）、まま見られるように思います。

退職したアイコ先生も、あの認識では世の母親たちと本音で関わりあうことは難しいでしょう。彼女もまた「自分のコンプレックスや弱さを直視できず、自分より弱い子どもに自分をまるごと受け止めてほしいという気持ちを持つ人」なのかもしれません。男女問わずこのような傾向の人が、子どもたちの心と身体を守り、育てるというのは、本質的に無理があることだと思うのです。

『ひだまり保育園おとな組』は、保護者のもつ多様なニーズだけでなく、援助者がもつ無自覚の課題についても考えることができる作品です。男性も妊娠する世界を描いた『ヒヤマケンタロウの妊娠』、作者自身の体験を描いた『妊娠 17 ヶ月!』もおすすめです。